美術科教育学会通信

１９９６年７月２９日発行　　美術科教育学会本部事務局　　Ｎｏ．２１
〒１８４　東京都小金井市貫井北町４丁目１－１　東京学芸大学
美術科教育学研究室内　Tel.0423-25-2111（内）2856,2857,2858　　Fax. 0423-21-3739

新人研究者にとっての美術科教育学会とは

佐賀大学　栗山裕至

美術科教育学会は新人の研究者（特に大学院生）の眼にどのように映っているのか。彼ら新人は学会に何を見出しているのか。以下、私見として述べさせて頂くこととする。

言うまでもなく、教育系大学の美術科に学ぶ学生（特に教員志望の学生）の将来選択は現在大変厳しい。これは大学院生（以下「院生」）にとっても同様である。大学院で行なった探究がどの程度社会の側から評価されるのか、そして修了後どのようにして探究を継続していけばよいのかについては、制作と理論のどちらを主とするかに関わらず未知数の部分が多い。このような状況にあって、何に目標を定め、どのように自己を高めていくべきかは極めて切実な問題である。（ステイタスとしての修士号に固執する学生は論外である。）。何か突破口を見出したい、有効な手立てが欲しいと考える院生にとって、現在の美術科教育学会はある種のリアルさをもって存在していると思われる。そのリアルさとは自分と同じ立場（または近い立場）にある他大学の若手の研究者諸氏との「出会い」であり、彼らが提示する着眼や方法の「発見」である。

既に功なり名遂げた先達の方々からすると、そうした出会いや発見は瑣末でつまらなく見えるかも知れない。年若い（青い）集団の胡散臭さは世の常であり、現にこの拙文の表題を見ただけで苦笑される向きもあるだろう。だが現在、先の「出会い」や「発見」が一人ひとりの新人研究者の間で自発的・主体的に、そして着実に生み出されつつあるという点に私は注目している。一見するとそれはあまりに小さな単位であり、行動としての熱っぽさに欠けている。それでも、地域や所属などの物理的な距離を超えて若手研究者の間に潜在的な信頼関係が生まれていくことは、美術教育の学問的発展や社会的浸透のために不可欠であると思われる。同時に、学会という組織における固定化の危険を回避する意味でも、一人一人が自発的に自由なネットワークを作り出していくことは重要なはずである。新人にとって、「出会い」や「発見」のために新たに強固な集団化を図る必要はない。むしろ求められているものは、例えば「誰のための、何のための美術教育か」というような問題意識を一人ひとりが内的に共有し、そして同時にその問題意識の具体的な部分での重なりやズレを互いに冷静に確かめ合うことであろう。

院生に関わって述べると、例えばいま私の手元に「美術教育院生連絡会会報　第１号」という小冊子がある。主に関西圏の院生諸氏の熱意によって1986年に発足、1990年に活動を再開した美術教育院生連絡会は、院生を中心とする若手研究者の連絡や研究協力のための会である。（発足時にも会報と院生名簿が発行されていた。ここで取り上げた「会報第１号」は活動再開後の発行である。）もともと確実な資金源も何もない地味な存在（？）であったため、連絡会そのものの活動は現在再び休止状態にある。しかし、「若手研究者どうしのヨコのつながりを作る」という会の当初のもくろみは、「Ｗ・Ｅの会（東西の大学の交流として始まった親睦会）」等の場での、相互の情報交換というかたちで着実に根づきつつあると思われる。（結果として重要だったのは、固定した組織の存在ではなく、そこから最初に発信された呼びかけの意味が個人レベルで浸透し定着するか否かだったこ

とになる。）ここ数年の間にも、学会や研究会などにおける院生相互の距離がさらに近くなり、対話や協力関係が自然に生まれていることは、まじめに評価されるべきである。

研究テーマをどのように設定するか、論文執筆・作品制作等の上で必要な資料はどのようにして確保すればよいか、そして将来どのように自らの研究を深めていくべきか。院生が直面するさまざまな課題は地域や大学の別を問わず共通する点が多い。美術そして美術教育という極めて難しい世界に身を置いて、自分は果たして研究を継続していけるのだろうかという素朴でしかも深い不安や悩みは、若い研究者の誰しもが同じように抱いているはずである。何から始まってもよい。くだけた会話から立ち入った質問・疑問のぶつけ合いにいたるまで、多様な情報交換の方法と中身があり得ると思われる。（パソコン通信の有効利用も既になされているはずである。）個人レベルや大学院相互の交流を通じて精神的に励まされることも多いし、互いにサポートし合いながらの研究活動も大いに期待できる。あるいはもっと端的に、「井の中の蛙」であった自分を他大学の院生と出会うことで初めて発見し、ショックを受ける人もいるのではないか。

私自身が学会に籍をおいてまだ長くないので、実際のところ少々発言しにくいのだが、例えば各大学の院生が様々に交流し刺激し合うということが、この学会のもつさまざまなベクトル（可能性といってもよい）の一つであるのは確かであろう。全国の教育系大学の多くに大学院が設置された現在、学会は他大学の教官や教育現場の先生方、そして院生の研究活動に直接触れる機会としての性格を強くもっている。しかしこの点に関する院生の意識、つまり相互交流を通して自分の研究の方向性や展望（限界）を知り、今後の研究への手がかりを得ようとする積極性に関しては、大学によって実はまだまだ差がある。見方を変えれば、日頃実際に院生の指導にあたっている大学教官の意識に何らかの差が存在することになる。少々立ち入り過ぎたであろうか。

もちろん、単に「若手」が多く登場すれば良いのだと言っているのではない。既に学会においては、院生の口頭発表や寄稿論文にも一定の質的充実を求めようとする声が出ている。これは、今後の美術教育研究の担い手となるべき若手研究者のいっそうの学問的習練が、美術教育全体の次なる発展形を探る上で必要とされていること、研究を本格的にスタートしたばかりの「院生」もその例外ではないことを意味している。新人にとって、研究活動面での新たな（しかし当然の）課題とみることができよう。具体的な取り組みのあり方はひとまず個々人に委ねるとして、私としては次のようなことを考えている。

一人の新人が研究を継続していくことは、美術そして美術教育なるものにずっと向き合い続けることを意味する。もしその新人が研究を途絶したとすれば、それは美術そして美術教育がその人の「生」に必然性を持たなかったことになる。ところで学問研究とは、そもそもその必然性を問い続ける営みそのものではなかったか。なぜこのようなことを述べたかというと、あまりに短い院生の期間にあたかも分かったような錯覚を起こして研究から離れたり、内的な動機もろくにないままいたずらに表面上の業績に腐心しているというような、新人に対する極めて辛い指摘の声があるからである。論文内容の洗練等ももちろん緊急なのだが、美術や美術教育にどのくらい本気で向き合っているのか、その姿勢が若手研究者の交流の場においてあらためて問われるべきである。

さらに、新人研究者の自発的交流が学会を起点にしてさらに拡大していくことも、今後不可欠であろう。現状として、美術教育に関わる人間集団の全体数と学会の規模とが必ずしも合致しているとは言えない。美術に対する社会一般の好感や関心の度合いと、美術教育への評価の度合いも同様である。本来ならもっと大規模であったり、社会的な共感が得られたりして良いはずである。学会の周囲の、本来賛同者や推進者であるはずの人々の意志や展望に対して、これからの学会は十分に回答し得るだろうか。新人研究者の潜在的なネットワークの広がりと質も、学会の可能性にやはり直接関わっているのである。

前略、美術教育のこれからを創造する皆様へ

《院生による、新たなネットワークづくりへの提案》

東京学芸大学（院生）谷口幹也

現在、美術教育が多様な形で試みられ、新たなる解釈と活動がさまざまな場所で展開されています。学校に限らず、美術館、各自治体における公民館などが身近に美術に触れる機会を私達に提供してくれ、その中では、学校の場で行なわれている授業のような、言うならば教える人、教えられる人というような関係ではなく、共につくる人、人と人の関係をつくること自体が作品であるといったような美術の活動が広がりをもって展開されています。一人で絵を描いたり、粘土で何かをつくる造形活動だけではなく、自然の営みについて考えたり、自分の住む街について考えていくことが、一つのテーマとなってグループ活動による共同制作となり、多様な表現方法を駆使してテーマについて掘り下げていくようなこともされています。学校の範疇をこえ、自主性に富み、ボランタリイな精神に支えられた美術表現、活動が各地で展開され、また必要とされているのではないでしょうか。私はこのような活動に中にこそ、美術教育学が学ばなければならない、豊かな人の営みがあるのではないかと思っております。

□A／Eネットワークへの提案

私はここで、各地で行なわれている美術教育活動をつなぐネットワークをつくることを提案します。このような試みはすでに「W・Eの会」によって行なわれてきたことは承知しているのですが、ネットワークを創りたいという声を私から発することによって、いまいちど新たなる展開、接続を促したいと思っているのです。A/EのAとは art のことであり、Eとは education のことであります。各地で行なわれる新たな試み、活動についてアート・教育の両面から考え、現在の日本の状況を描くことによって美術教育学の展開を広げる礎をつくりたいのです。この活動はもちろん自主的に行なわれるものであり、すでに研究を始め問題意識を持って活動されている若い研究者、院生、活動家の方々との協働作業を展開していきたく思っているのです。美術、教育その両方に通じる活動を横断し、様々な角度から現在の状況を把握し、また、それぞれの活動に対する報告や、批評していくことが現在必要なのではないでしょうか。そして、その中で行なわれる交流こそが研究者、活動家の新たな力となり、次世代へとつながる関係を育むのではないでしょうか。それにつながる第一歩として、A／Eネットワークの必要をここに提案いたします。

私がこのような考えにいたったのは、ワークショップを自ら企画、運営したり、同世代の若い活動家や、研究者に出会うことによってこの想いを強めていったのは間違いないようです。自分の中では解決できないこと、自分の思いもよらないようなことが各地で企画され、そして運営されているという驚き、先達たちの豊かな経験が私を刺激し、考えることを促してくれるのです。そして、美術教育とはとても当たり前な人間の活動のことを言うのではないでしょうか？　人が表現し、何かを学びとろうする。そして、人に思いを伝え、子供に伝え残したい記憶や思いを表現すること。たとえばそれは子供に対する親の姿であり、一人のアーティストの姿かも知れません。教育で言えば、家庭教育、学校教育、社会教育、生涯教育、人の営みのすべてにかかわる活動が美術教育の範疇で行なわれ、また、美術教育学は人の営みすべてを対象にしたものであると考えるからです。

様々な視点から美術教育について考えている方の協力、実際の活動に参加している方の報告や意見、忠告が、人の営みについて描こうとするときにやはり必要となってくるのです。活動、研究の輪が重なり、つながることを準備し、そして大きな輪を創りたいのであります。

まず、これから研究へと向かう院生によって、美術教育の現在を考える横のつながりをつくることを提案いたします。自由な研究意欲を持つ院生の専門をこえた自由な意見が交わされる状況をまず準備し、つながりを創っていきたいと思います。

これを読んでいただいた諸先生、先輩方のご意見をいただけたらと思っております、そして、私の提案に賛同していただける美術教育のこれからを創造する皆様の声をお待ちしております。

なお、以下に現在進行中の二つのプロジェクトについて情報を記しておきます。興味がおありの方はぜひご連絡下さい。

ＩＺＵＭＩＷＡＫＵ　ｐｒｏｊｅｃｔ　１９９６

１９９４年に東京都杉並区、杉並区立和泉中学校で開催された IZUMIWAKU project《学校美術館構想》が今年、《学校アーツセンター構想》として、新しい試みとしてまた開かれようとしています。実際今使われている中学校で開催される美術展として、地域に根ざしたアートと学校の在り方を模索する試みとしてたいへん興味深いものがあります。この中で、「応答する美術」をテーマにシンポジウムが行なわれます。興味のある方はぜひご来場ください。

タイトル：ＩＺＵＭＩＷＡＫＵ　ｐｒｏｊｅｃｔ　《学校アーツ・センター構想》展
期　　間：１９９６年８月１７日（土）～８月３１日（土）
場　　所：杉並区立和泉中学校　（東京都杉並区和泉２－１７－１４）

○シンポジウム　日時：８月２４日（土）１３：００～
場所：杉並区立和泉中学校　３階　視聴覚室
問い合わせ先：ＩＺＵＭＩＷＡＫＵ事務局　☎03-3324-6800

宇都宮美術館（仮称）開設記念プレ・ワークショップ　～水ヲアツメル～

自分の住んでいる町の水、いろいろな場所から市民の人たちにそれぞれの水を汲んできてもらい、それを一堂に会するなかで濾紙にこしていく。その中からどんな模様、姿が浮かび上がってくるのか。けっして同じではない人の息づく場所、それを水を通して描き、実感しようとする試みが７月２０日（海の日）に宇都宮市役所で行われました。これは、キュレーターの岡本康明（美術科教育学会会員）さんの呼び掛けによって始まり、多くの学生のサポートと市民によって作られるワークショップでした。宇都宮美術館では、来年の４月からアーティストによるワークショップを毎月開くそうです（具体的スケジュールや参加アーティストはまだ未定）。これらの活動をサポートし、運営に参加してくれる美術教育の院生・学生を募っております。美術館において美術と教育のこれからを考えていく場をつくりたいという提案が岡本さんからありました。市民・美術・教育、この三つが重なる場所が作られようとしています。

（問い合わせ等ありましたら、谷口まで連絡ください。）
谷口幹也 〒185 東京都 国分寺市 内藤 ２－４１－８
☎ 0425-73-7608

《第１８回美術科教育学会東京大会完了のお礼》

武蔵野美術大学　村上暁郎

今春３月２７日から２９日までの３日間、武蔵野美術大学において標記の学会を開きましたが、無事完了いたしました。私学のこと故、理事会などの対応が多く、これまでの国立大学の運営とはかなり異なるところもあったとお感じのことと思いますが、本部事務局の絶大なるご協力と関係理事各位の支援によりまして、無事に終わらせることができました。ここに深謝する次第です。因みに企画・運営にあたりましては、会員を中心とした協力スタッフの半年にわたるご協力、開催時における武蔵野美術大学関係者、東京学芸大学の院生ボランティアの活動に負うところ大でありました。おかげさまで、２６３名の参加者をもって事故もなく終了することができました。ここにご報告いたす次第です。

１９９６年7月１５日

《第１８回美術科教育学会での武蔵野美術大学前田常作学長のご挨拶》

３月の学会では、前田常作学長より、外交辞令ではない、心のこもったご挨拶をいただきました。会員の中から「美術教育多難の折りに元気づけられるお話であったので、ぜひ学会通信に掲載してほしい」との声があがったほどです。つきましては、掲載が遅くなり前田学長先生には申し訳ないのですが、ここに紹介させて頂きます。（本部事務局）

挨　　拶

武蔵野美術大学学長・前田常作

私には、小・中・高等学校での教職経験があります。私は、そこで美術教育の黄金期を経験したわけですが、その時の経験に照らして、今の小・中学校の美術教育には問題があると感じています。

「感性を大切に」と言われながら、現実の美術の時間は減っています。美術教育の重要性が忘れられているかのようであります。

また、コンピューターの導入が叫ばれていますが、子どもは手でものを作らなくては駄目であります。マウスで絵を描くにしても、手で描いた経験が不可欠です。手で絵を描いた経験があればこそコンピューターで絵を描くことも出来るのであります。言い換えるならば、子どもには「手で考える」という経験が大切なのです。

是非とも、この学会に頑張って頂いて、美術教育の正常化を目指して頂きたいと切に願う次第であります。

今後の学会の発展を祈念いたしまして、挨拶に代えさせて頂きます。

《第１７回美術科教育学会「公開シンポジウム」開催ご案内》

福島大学　白澤菊夫

標記の通称「出前シンポ」を今秋１１月９日(土)、福島大学において開催いたします。午前１０時から午後４時３０分まで、昼食を挟んで連続６時間のイベントを策定しつつあります。企画の特徴としましては、岡本太郎美術館開設準備室（川崎市）の仲野泰生氏による講演「市民・美術・教育」を午前中に行い、午後からは地域活動者、福島大学教官、他大学教官、美術館学芸員等による「公開シンポジウム」を開きます。因みに全体テーマは「学校のうちとそと・美術のうちとそと」 ── 地域・学校・美術の境界をめぐって ── です。詳細なご案内は、事務局から学会通信（９月末発行予定）に同封して配布して頂くことになっています。心地よい東北の秋を旅する機会がありましたら、是非ご参加ください。お待ちしています。

《 学術情報センター電子図書館サービスへの登録について 》

文部省の学術情報センターが来春より,400の学会誌の全ページを電子図書館サービスで提供、将来的には4000種類の論文誌を網羅するという計画が進行中です。当学会もデータベース部会を通して、このサービスへの参加を検討中です。以下にデータベース部会の上山浩会員と学術情報センターの担当者のやりとりから骨子を紹介しておきます。

・データは、発行された雑誌から、書誌データ（論文などの標題、著者名、所属機関名、抄録等）と、おもて表紙から裏表紙までの画像データを作成する。

・システムとしては、サーバ側では、作成したデータを Sybase(Unix上でのリレーショナル・データベース）で管理している。利用者側は、専用クライアントを用いて、Z39.50のプロトコルによりサーバとやりとりを行い、書誌データからの論文等の検索とページの画像データの表示及びページの印刷出力が可能。

・現時点では、利用者側のクライアントは、次の機種とOSの上でのみ動作する。

(1) SUN Microsystems 社の workstation、あるいはその互換機

(2) SunOs 4.1.3 上の X11R5,または X11R6 か,Solaris 2.X上のOpenWindows、または、X11R5,または X11R6

（現在、動作可能な環境を広げることが計画されている）

・利用者は大学の研究者などが中心になるが、大学以外の機関に属する学会の正会員の利用も認められる予定。

《 ミニ・インフォーメーション 》

○『美術教育学１８号』に掲載を希望される方は、８月１５日(木)必着で、東京学芸大学美術科教育学研究室内・美術科教育学会本部事務局あてに原稿をお送り下さい。

○目下「学会会員名簿」を作成中です。できるだけ最新で間違いのないデータを掲載したいと思いますので、住所、電話番号、勤務先（所属）、勤務先電話番号に変更があった方は、本部事務局まで書面にてご連絡下さい。

○８月３０日にぺんてる本社ビルで学会理事会が開かれます。会員の方々も何か懸案事項がありましたら、それまでに本部事務局の方へお知らせ下さい。

《 日本学会事務センターへの会員事務業務移管に関連して 》

すでに日本学会事務センターより会員各位のお手元に「美術科教育学会会員の皆様へ」という見出しの『ご案内』が届いていると思いますが、学会通信でもごく簡単にその要点を記しておきますので、お目通し下さい。

○会費は学会事務センターの方へ払い込み下さい。未納者にはセンターから請求（通常は年３回までで、振込み用紙を送付します）がありますので、センターの振込み用紙で送金下さい。

○入退会、住所、勤務先、姓名などの変更は、ご面倒でも「学会事務センター」と「学会事務局」の両方へお知らせ下さい。なお、入会につきましては当面は本部事務局が受け取った申込書を、学会事務センターへ回送しますので、まずは本部事務局までご連絡下さい。センターへの連絡は書面にてお願いします。なお、所属学会名、会員番号（センターからの発送物および請求書の宛名の右下の１０桁の番号）を明記して下さい。

○学会誌、学会通信等は学会事務センターの方から発送されます。

○事務移管に伴います行き違いや疑問は、学会本部事務局の方へお知らせ下さい（できるだけ文書で）。

○日本学会事務センターの宛名は、〒113 東京都文京区本駒込５－１６－９、電話とファックスは Tel.03-5814-5810、Fax.03-5814-5825 です。